ないという主張である。しかし差異を主張しつづけることは，単なる既存の価値への破壊の論理に留まりかねない危うさも有している。８章で倉本が述べているように，不当性の告発に終わらず，新たな価値の創造ができるのかが，最も重要な課題であろう。さらにいえば，２章で石川が述べているように，差異に価値があるという主張は，ともすると差異の縮小や克服を目指す障害者への社会的支援と矛盾することになる。バリアフリーなど共生のインターフェース作りに対して拒否し，孤立主義に向かってしまえば，不当性の告発すら共感を得られないものになろう。「障害学」はまだ始まったばかりである。最初から答えの用意されている学問はない。本書で提起された数々の論点はこれまでも多様な場で論じられてきたことであるが，ようやく「障害学」という共通の場を得て，相互の連関を持つ問題として論じられるようになったのである。

評者は，「障害学」が脱却すべきと論ずる既存の学問「社会福祉」に身を置いている。本書の中での「社会福祉」のとらえ方は，あまりにもステレオタイプに規定されている観があるが，「社会福祉」が障害者のすべての問題を取り扱うという錯誤がこの業界にあることも否定できない。「社会福祉」という制度が有している権力性を考えるならば，より謙抑的にならざるを得ないであろう。障害者を保護し，パターナリスティックにすべてを代弁する専門家の学問であってはならないのである。誤解を恐れずに言えば，「社会福祉」は，社会がどこまで他人の生に関わることができるのか，関わるべきなのかを探求する援助者の学問である。そして援助する立場の障害者を含む援助者の論理を探求する過程において，「障害学」と切り結ぶことができるのではないか。読後にそうした感想を強く感じた。

（石川准・長瀬修編著『障害学への招待』明石書店，1999年3月，321頁，定価本体2800円＋税）

（いわさき・しんや　法政大学現代福祉学部専任講師）

色摩力夫著
『フランコ　スペイン現代史の迷路』

評者：川成　　洋

スペインのフランコ（1892〜1975）といえば，ヒトラーやムッソリーニと並ぶ「ファシスト」というのが通り相場であるのだが，彼をファシストと断定するのはいささか無理があるのではあるまいか（もっとも，「ファシスト」という用語を政敵を誹謗するための侮蔑用語ではなく，厳密に定義しておかねばならないが）。また「独裁者」としてもフランコは，後二者と比較すると，毀誉褒貶を含め，かなり小粒な感じが否めない。

かく言う私も，実は，「フランコのスペイン」を体験したことがある。私がはじめてスペインの大地を踏んだ1969年，たまたまマドリードの闘牛場に行ったとき，タイミングよくというべきか，フランコの闘牛見物とかち合ってしまった。正門のゲート付近は，厳めしい武装警官や治安警備隊，それに騎馬警官たちでぎっちりと固められ，さらにその外側は取り巻き連中で埋め尽くされていた。蟻の這い出る隙もない，とはこのことだったのか，と思ったり，「フランコをピストルで射止めようとしてもその射程距離に入れない」と何かの本で読んでいたが，実

にその通り，と妙に納得したものだった。

それにしても，連日連夜のサイレン。パトカーや装甲車，護送車のサイレンが鳴り響いていた。それも四方八方から聞こえてくるのだ。東京でパトカーのサイレンには十分慣れていたはずだったが，マドリードのそれは比較にならない。ヒステリックな感じがした。それに，市内のいたるところに武装警官や治安警備隊員が目を光らせていた。

そのうち，マドリードで知りあった人が私に助言してくれたのだが，スペインでの唯一のタブーは，独裁者である「フランコ」という言葉なのだ。たとえ日本人同士のあいだでの日本語でも「フランコ」という言葉が私服警官に聞かれたら，独裁者を誹謗・中傷した容疑で直ちに連行されてしまう。また，公安当局が使っているデモ隊排除用の放水車の放水には青い塗料が混入されていて，その青い塗料は一度皮膚や衣類に付着するとなかなか落ちないので，デモ参加者は翌日でも逮捕されてしまう。しかも，放水車はどこからくるのか，どこから放水するのか見当すらつかないので，デモに近づかないように，との忠告であった。また，市民であれ，私のような旅行者であれ，夜間（多分，11時頃以降だったように思うが）帰宅する場合，自宅やピソ（マンション）の自室の鍵をもっていても，自分で鍵を使って開けることができない。必ず「セレーノ（sereno）」と呼ばれる「夜警」の老人をパンパンと手を打って呼んで，ドアを開けてもらう。セレーノは，自分の担当する地区のすべての鍵をもっていて，ガチャガチャと腰にさげた鍵の束の音をたてながら，やってくるのだ。もちろん，こうしたセレーノは，公安当局と通じているのは言うまでもない。

そういえば，かつて色川大吉氏が，スペインを「眼また眼の国」と言った（『ユーラシア大陸思索行』，平凡社，1973年）が，まさしくその通りであった。要するに，フランコはスペインを「中世の異端審問の国」に逆戻りさせたとか，「監獄の国」に変えてしまったといわれるのも，故なしとしないのである。

ところで，フランコは言うまでもなく，スペイン内戦の張本人である。わが国でのスペイン内戦関係書は，内戦文学をも含めると，それこそ汗牛充棟ただならぬというべき程であるが，フランコに関しては，何故か，本書を含めて，わずか３冊しかない（ホアン・アララス著，坂本静雄訳『フランコ将軍』ヤングメン通信社，1942年。フアン・ソペーニャ著『スペイン―フランコの40年』講談社現代新書，1977年）。

ともあれ，83歳で病死するまで独裁者であり続けたフランコは, 本書も指摘しているように, 実に謎の多い人物であり，「スペイン現代史の迷路」ともいうべき存在である。

いかにしてフランコが内戦勃発（1936年７月）から，死の床に伏したままで権力をほしいままにできたのであろうか。

それには，内戦の緒戦段階からライバル，もしくは先輩たちが次々と姿を消してしまったこと，フランコ陣営の諸々の勢力を拮抗させ，相互に牽制させ，そのバランスの上にフランコ自身が屹立したこと，強力なライバルの台頭を事前に摘み取ってしまったこと，第二次大戦期にヒトラーのスペイン直接介入を阻止し，中立を維持することで連合国側とのバランスを取っていたこと，戦後は東西の冷戦の真只中で反共チャンピオンとしてアメリカとイギリスの両国から認知され支援を受けたこと，地中海というスペインの地政学的利点が再認識されたことなど，フランコ個人の持前の「巧妙な慎重性」といった「才能」もさることながら，スペイン内戦以降の時代の流れがフランコに有利に働いたという「幸運」に恵まれたことも事実である。

こうしたさまざまなフランコの時代の節目ご

との対応のなかで，反フランコを標榜する勢力ですらフランコの業績として認めざるをえないのは，1940年10月のフランスのスペイン寄り国境の町エンダヤで行なわれたヒトラーとの「エンダヤ会談」であろう。よく知られているように，スペイン内戦の勃発時点で，軍事クーデタが頓挫しかかったとき，フランコはヒトラーから兵器類と兵員の援助を受け，それでフランコの指揮するアフリカ軍をスペイン本土に移送できた。つまり，ヒトラーの膨大な最新の兵器類の援助，訓練済みの兵員の支援なくしては，フランコは内戦に勝利できなかったのだ。そのヒトラーが，今度はフランコに支援を申し入れるのは当然であったろう。すでに英領ジブラルタルの攻略である「フェリクス作戦」を策定していたヒトラーのスペイン介入の提言を，フランコは事もなげに拒否する。それも「イスラム教の祈禱僧」のように感情の起伏がなく弱々しく単調な口調だった。９時間におよんだ「エンダヤ会談」の終わり頃に，ヒトラーはイスから跳び上って，これ以上の議論は無用だと叫んだという。おそらく，フランコ陣営の作り話だと思うが，後にヒトラーは，あのような苦い体験（フランコとの「エンダヤ会談」）をするくらいなら，歯科医に行って歯を３，４本抜いてもらう方がいくらかましだ，とムッソリーニに漏らしたという。

結局，「エンダヤ会談」はフランコとヒトラーに明暗を分けたことになる。その典型的な評価を二つばかり挙げておこう。

「フランコは満足し，安心しきって，一方，ヒトラーは激怒し，欲求不満のまま，エンダヤから立ち去った」（ブライアン・クロジャー『フランコ――伝記』1967年）

「戦争に関して，フランコはヒトラーよりもはるかに明るい，ということを明確に認識している。結局，フランコはプロフェッショナルであり，ヒトラーはアマチュアであった」（J. W. トライサール『フランコ――ある伝記』1970年）。

ヒトラーが切歯扼腕しフランコがほくそ笑んだ「エンダヤ会談」の結末に，最も安堵の胸をなで下ろしたのは，1713年以来ジブラルタルを占領してきたイギリスのチャーチル首相であった。かくして，第二次大戦期に「中立」と「非交戦」のあいだでバランスを取りつつ，連合国側への接近の切り札を入手することができたのである。もちろん，この「エンダヤ会談」が，スペインにおいて，フランコの英雄的な大胆不敵さの恰好の証左として，まことしやかに伝えられ，第二次大戦期の「フランコ神話」の一つに祭りあげられたのだった。

結局，政治家として，また軍人として，傑出していたかもしれないが，「面白くもおかしくもない秀才」であったフランコは，単なる古色蒼然たる保守思想の持ち主であり，単純素朴な現実主義者だった。それに，本書によるとフランコは，ガリシア地方の農民に特有の「レトランカ」を持っているといわれたことがある。これは馬につける「尻帯」のことであるが，しばしば「ブレーキ」の意味に転用され，「しぶとくて抜け目なく，なにごとにも本心を明らかにしない」という実利感覚を表現している。フランコは紛れもないガリシア人であった。

フランコの生涯にわたって一貫して流れていたのは，スペイン特有の「ラテン気質」とは全く無縁の，慎重さを旨とする「ガリシア人気質」だったのであり，それになによりも「イスパニダー（スペイン的統一性）」を重視する頑な「ナショナリスタ的信念」だったのではあるまいか。でなければ，あれほど長く「独裁体制」を維持できなかったはずである。（色摩力夫著『フランコ　スペイン現代史の迷路』中央公論新社，2000年６月，349頁＋税）

（かわなり・よう　法政大学工学部教授）